

独思録：「新年雑俎」(1/4)

寺田寅彦のエッセイに「新年雑俎」に、

「去年の正月ある人に呼ばれて東京一流の料亭で御馳走になったときに味わった雑煮は栗餅に松露（しょうろ）や蓴菜（じゅんさい）や青菜（あおな）や色々のを添えた白味噌仕立てのものであったが、これは生れてから以来食った雑煮のうちでおそらく一番上等で美味な雑煮であったろうと思われる。それなのに、それと比べて我家の原始的な雑煮が少しも負けずにうまく食われるから全く不思議なものである。」

という行があります。

昨年の大晦日、東京都千代田区の日比谷公園内に「年越し派遣村」が開設されました。派遣切りにあった300人以上の人々が、ボランティアの人々から受けた食事、「東京一流の料亭で御馳走」や「我家の原始的な雑煮」よりも更に増してうまく感じられたことでしょう。

本来、一番先に対策を打ち出すべき政府が何もしないために、経団連会長もマスコミのインタビューに引き出され、渋々、急速に悪化した雇用に対する経済界の対応の遅れを認め、「しわ寄せを受けている請負会社への支援も発注元企業として検討する考え」や「失業者の住宅確保や就職支援のため、企業が出資しあって基金を創設する」構想を明らかにしました。

しかし、「好景気の間は短期間働くことを好む人たちが多くいた。仕事を覚え、非正社員から正社員へ変わるプロセスもあった。」と述べ、「雇用形態の多様化は労働者にとっても一定の意義があった。」との言い訳を言い、経団連各企業が一番の利益を享受していたことのカモフラージュを忘れない強かさを示しています。

また、某社説では、「米金融危機の一因に監督や規制の甘さがあったのは否めない。そして今は金融混乱の收拾や景気・雇用対策で政府の役割が期待されている。しかし資本主義の活力をいかにすには国の介入は少ない方がよい。特に日本はまだ規制が多すぎる。」とし、「大きい政府」「小さい政府」の役割の再定義が必要と延べ、「サッチャー元英首相、レーガン元米大統領らが1980年代に進めた規制緩和や民営化などの改革は競争力を強め、90年代を中心とした米欧の長期好況の基を築いた。市場を信頼し自由競争を重んじるこの保守主義の政策が金融危機を招いたとする見方もあるが、必ずしも正しくない。」としています。

確かに、日本にはまだまだ規制が多すぎると思いますが、「何を規制し、何を規制しないか」をマスコミも自身の考えに基づく定義を明確・具体的に提案すべきです。過っては、市場の規制・保護を自由競争の対極として保守主義と言っていたことを「市場を信頼し自由競争を重んじるこの保守主義」と言い、保守主義の定義も明確にせず、読者には分りにくい論調で、マスコミが派遣法に対する今までの肯定的な立場を類被りしているとの感も否めません。

最終的には、小手先の雇用や景気対策を超えた大胆なビジョンをベースに、それを実行する政治力が今の政府に求められますが、所持金がなくなり、数時間歩いて「年越し派遣

村」に来て、食事や宿泊場所の提供を受け、年明けに生活保護の申請を行わなければならない人々に対し、小手先の雇用や景気対策を超えた大胆なビジョンなど言っている暇はありません。

小手先の雇用や景気対策も重要なことだと言う事も、政府、経団連各企業、マスコミは忘れずに、麻生首相が言うスピーディーな対策を、小手先でも早く実施することが必要です。

遅れると、如何に、大胆なビジョンが実施されても、人々の消費マインドが冷え込み、麻生首相が大見得を切った、「欧米は10年、日本は5年の景気の回復」に、更なる時間がかかると思いますが。

< 寺田寅彦 (1878-1935) >

随筆家、地球物理学者。東京市麹町区（現在の千代田区）生まれ。東京帝国大学卒。



航空研究所、理化学研究所、地震研究所、東京帝国大学（教授）などに所属、大正12年（1923）45才の時、関東大震災に遭遇し、火災旋風などの調査に従事する。

「天災は忘れた頃に来る」という言葉を言い出したのは寺田寅彦であるといわれている。漱石の門下生でもあり、吉村冬彦の筆名で数多くの随筆を書いている。

作品に『漫画と科学』『科学と文学』『西鶴と科学』『珈琲哲学序説』『神話と地球物理学』などがある。

読売：「東京・日比谷公園に「年越し派遣村」開設、失職者を支援」(12/29)

失業と同時に住まいをなくした派遣労働者や期間従業員のため、31日～1月5日朝まで東京・日比谷公園で「年越し派遣村」が開設される。

非正規労働者を支援している労働組合やNPO法人などでつくる実行委員会の主催。

31日～1月4日の午後1時～同6時、弁護士が労働相談や生活相談に応じるほか、31日の昼食から1月5日の朝食まで炊き出しを実施する。

問い合わせは「全国ユニオン」(03・5371・5202、30日まで)か、年越し派遣村の臨時電話(090・3499・5244、1月5日まで)。



実行(日比谷公園)

集会(日比谷公園)

テント群(日比谷公園)

厚生省講堂(夜間)

毎日：「年越し派遣村：寒さ吹き飛ばせ 歌舞団エイサーが激励」(1/3)

派遣契約の打ち切りや解雇のため職や住居を失った労働者を支援する「年越し派遣村」が開設された千代田区の日比谷公園で2日午後、東京を中心に活動する歌舞団がエイサーを披露し、食事や仮眠所を求めて集まった人々を励ました。

エイサーを踊ったのは「『月桃の花』歌舞団」の関東メンバーの5人。音楽家の海勢頭豊さんとの交流がきっかけとなり1997年に発足。「命どう宝」の精神を全国に広げることがを目的に活動し、「ワーキングプア」の問題を扱った歌劇や「反貧困」を訴えるイベントに出演している。

日比谷公園では「仲順流れ」や「豊年音頭」など5曲に乗せてエイサーを踊った。年末年始を公園内のテントで過ごす人々は、ひんやりとした空気の中、大太鼓とパーランクールの響きに耳を傾けていた。

「月桃の花」歌舞団関東事務局の神子幸恵団長（42）は「報道やインターネットのブログで派遣村のことを知った。寒さの中に放り出された労働者がどんどん増えている。命を切り捨てるような行為は許せない」と話していた。



春秋：「世界中が冬景色」(1/1)

歳時記をひもとけば「初」を冠したいくつもの季語が出番を待っている。初明り、初菫（あかね）、初晴、初御（み）空（そら）、ひとまとめにして初景色。元旦のすがすがしい気分で眺めると、いつもの空も街も輝いて見える。希望に満ちた美しい言葉たちだ。

ものみな凍りつく経済危機のなかで新年を迎えた。世界中が冬景色に違いない。しかし、たとえば私たちの国はかつて敗戦で破滅を体験し、そこから甦（よみがえ）った記憶を持っている。焦土の上に新たな政治や経済の仕組みを築き上げ、産業を興し、暮らしを整えていった。まだ60年ほど前の、忍苦と再生の風景である。

戦後初めての丑年は1949年。ちょうど今年と同じ「己（き）丑（ちゅう）」だ。証券取引所が再開され、国鉄の特急列車が復活し、湯川秀樹博士はノーベル物理学賞を射止めている。国際社会の援助があったにせよ、この立ち直りの早さはひたむきに生きた一人ひとりの底力ゆえだろう。日本人も、あまり捨てたものじゃない。

丑という漢字は指先に力を入れて強くものを取る形からできた。白川静氏の「字統」はそう説いている。そんな由来にあやかって、復活のカギをつかみ取りたい。憂いは多く道は険しいけれど、過去と未来に思いを巡らせばまた新しい景色が見えてくるかもしれない。「加速するものこそ光れ初御空」（五島高資）

< 湯川秀樹（1907-1981） >

理論物理学者。理学博士。東京市麻布区市兵衛町（現：東京都港区）生まれ。京都大学・大阪大学名誉教授。

中間子理論の提唱などで原子核・素粒子物理学の発展に大きな功績を挙げ、1949年（昭和24年）日本人として初めてのノーベル賞を受賞した。

著書に『現代の対話』『目に見えないもの』『科学者のこころ』『物理講義』『天才の世界』『旅人 ある物理学者の回想』など多数。



< 五島高資（1968-） >

俳人、医師。長崎県長崎市生まれ。本名樽本高壽。自治医科大学医学部博士課程（血液・免疫疾患学専攻）修了。医学博士。現在、自治医科大学医学部講師。

インターネット俳句会「俳句スクエア」を創設し主宰。

現代俳句新人賞、現代俳句評論賞などを受賞。句集に『海馬』『雷光』『蓬莱紀行』など。



天声人語：「困難な新しい年」(1/1)

歴史の不思議の一つは、世が乱れると、まるで天に意思があるかのように英雄や偉人が輩出することだろう。太平の世に傑物は出にくい。「英雄のいない時代は不幸だが、英雄を必要とする時代はもっと不幸だ」の名言が歴史の本質を言い当てる。

今年が生誕200年のリンカーン米大統領もその典型といえる。奴隷解放を宣言し、南北戦争の試練と国家分断の危機を乗り越え、戦争が終わるや暗殺されて天に召された。人々の敬愛はいまも揺るぎない。

そのリンカーンが就任の宣誓に用いた聖書を、オバマ次期大統領が20日の就任式で使うそうだ。式では、聖書に手を置いて誓いを立てるのを伝統にしている。偉大な先人にあやかって国民に決意を示す。そんな思惑をメディアは伝えている。

米国、いや世界が、英雄を必要とするような時代にあると、オバマ氏は承知しているのだろう。つまりは困難な時代なのだ。新しい年に、氏のかざす松明(たいまつ)が赤々と燃えるのか、それともくすぶってしまうのか、世界中が目をこらす。

ひるがえってわが与野党を見わたせば、英雄らしきはどうも見あたらない。だが「天に意思がないのか」と溜(た)め息をつくなかれ。天下分け目の衆院選挙が秋までにやってくる。人物がいないと嘆かず、一票の力で将来をつかむ。天ならぬ「民の意思」の出番である。

何となく、今年はよい事あるごとし。元日の朝晴れて風無し。啄木。心機一転への思いもひとしおの初春。ポケットの一票を研ぎ澄ましておいて、「よい事」をぐいと引き寄せる年にしたい。

<エイブラハム・リンカーン(1809-1865)>

第16代アメリカ合衆国大統領。初の共和党所属大統領。任期中に暗殺された初めての大統領。ケンタッキー州ハーディン郡(現在はラルー郡)生まれ。

偉大な解放者(*the Great Emancipator*)、奴隷解放の父と呼ばれた。

リンカーンは奴隷制に反対していたため、彼が大統領に就任したことでアメリカ合衆国は奴隷制を維持したい南部と反対する北部で二分し、南北戦争を引き起こした。

リンカーンはその非常大権によって封鎖を宣言し、人身保護令状を保留、議会の認可無く支出を行って戦争を指揮し、北部連邦を勝利へ導いた。

1863年11月19日、ゲディスバーグ国立戦没者墓地の奉献式場で述べた演説の一節にある「人民の人民による人民のための政治(government of the people, by the people, for the people)」は有名。



<石川啄木（1886-1912）>

歌人・詩人・評論家。本名石川一。岩手県南岩手郡日戸村（現在の盛岡市玉山区日戸）生まれ。望郷と漂泊の天才詩人として知られる。

盛岡中学を自主退学して上京、与謝野鉄幹・晶子夫妻に訪れ、詩作活動を続けるが、病気で帰郷の後、『岩手日報』に評論を連載、11月には『明星』に再び短歌を発表し、新詩社同人となる。故郷での代用教員、北海道での新聞記者生活のなどを経て、1903年『明星』に長詩『愁調』を掲載、歌壇で注目される。1905年詩集『あこがれ』刊行。1910年『一握の砂』出版。

1912年肺結核のため東京で永眠、第二歌集『悲しき玩具』は死後出版された。



編集手帳：「年の初めに念ず」(1/1)

息でくもる窓に、指で丸や三角を描く。手でぬぐい、また息を吹きかけて今度は自分たちの名前だろう、何か文字を書いている。年の瀬に乗った電車で、姉妹らしき子供が遊ぶのを見た。

空気には目に見えない水の粒が浮かんでいて、暖かい空気が冷たいものに触れると、見えない粒はしずくに変わります。寒い朝、窓に息を吹きかけてごらん下さい...

何十年か前、小学校の理科の時間に教わった結露の仕組みを思い出したのは、少女たちが小さな靴裏をこちらに向けて顔を寄せ合った夜の車窓に、ふと学校の黒板を連想させたせいだろう。

暖かいものと冷たいものが接触してつくる水滴　涙もそうかも知れない。からたちのそばで泣いたよ / みんな、みんな、やさしかったよ。北原白秋「からたちの花」の一節だが、こごえた心が人の優しい気遣いやちょっとしたしぐさに触れて目に露をむすぶ作用は、誰もが経験で知っている。

新聞とはときに、「悲しみの入れ物」でもある。心痛む出来事を報じる記事が、紙面を冷たく覆う日もあるだろう。息でくもる小さな窓でありたいと、年の初めに念じている。

< 北原白秋 (1885-1942) >

詩人、童謡作家、歌人。本名北原隆吉。熊本玉名郡南関町生まれ。

早稲田大学英文科予科に入学して学業の傍ら詩作に励み、『早稲田学報』の懸賞に応じ、長編詩『全都覚醒の賦』が一等に入選。

明治 39 年には与謝野寛の招きで新詩社に参加。明治 40 年、西九州の南蛮遺跡の探訪旅行で名作『邪宗門』を生み出し、2 年後、詩集『思ひ出』を発売。名実ともに詩壇の第一人者となる。

詩、童謡、短歌以外にも、新民謡（『松島音頭』『ちゃつきり節』等）の分野にも傑作を残している。

生涯に数多くの詩歌を残し、今なお歌い継がれる童謡を数多く発表するなど、活躍した時代は「白露時代」と呼ばれ、近代の日本を代表する詩人である。

その他、詩集に『思ひ出』『真珠抄』『白金之独楽』『畑の祭』など、歌集に『桐の花』『雲母集』『黒檜』『牡丹の木』などがある。



余祿：「スイセン 1 輪の正月」(1/1)

「水仙いちりんのお正月です」。放浪の俳人、種田山頭火の昭和6(1931)年元日の日記にある句だ。前日の大みそか、手元の4銭を入浴に使い無一文になった彼は知人に金を借り、ささやかな正月準備をした。

「見切(みきり)の白足袋一足十銭、水仙一本弍銭(にせん)、酒一升一円也(なり) - - これで私の正月支度はできた、さあ正月よ、やってこい!」。この正月、山頭火は毎日のようにスイセンを詠んだ。「先祖代々菩提(ぼだい)とぶらふ水仙の花」「戻れば水仙咲ききつてゐる」……スイセンが好きだとも書いている。

「水仙は全く日本的な草花だと思ふ、花も葉も匂(にお)ひも、すべてが単純で清楚(せいそ)で気品が高い。しとやかさ、したしさ、そしてうるはしさを持つてゐる、私の最も好きな草花の一つである」。ちなみにこの年、昭和恐慌さなかの日本は、満州事変へと歴史の迷路にはまり込んでしまった。

野山が色彩を失うこの季節、孤高の美で人の心をとらえるスイセンの一輪で祝う正月もある。ただ戦後かつてない経済の暗転に見舞われた年は去っても、改まった年を素直にことほぐにはあまりにも厳しい見通しを取りざたされる年明けだ。

「雪中花」の異名の通り、厳寒の空の下でも凜(りん)としたたはずまいを失わぬスイセンの花は、しばしば希望にたとえられる。どんな厳しい境遇で迎えるお正月であれ、誰もが一輪の希望をそれぞれ心に抱ける新年であってほしい。そう切に願う。

この冬景色でも、どこかにはスイセンの群れ咲く場所は必ずある。その群落のように私たちの社会は凍(い)てつく風の中でも気品を失わず、春への道を誤りなくたどっていけるだろうか。「考へてをる水仙ほころびる」(山頭火)

< 種田山頭火(1882-1940) >

俳人。自由律俳句第一人。本名種田正一。山口県西佐波令村(現防府市大道)生まれ。早稲田大学文学部に入学するが神経衰弱のため中退。

1911年(明治44年)荻原井泉水の主宰する俳句雑誌『層雲』に寄稿。1913年(大正2年)井泉水の門下となる。1916年には、『層雲』の選者に参加。

1932年郷里山口の小郡町(現・山口市小郡)に「其中庵」、1939年松山市に移住し「一草庵」を結庵。自由律俳句の代表として、同じ井泉水門下の尾崎放哉と「静」の放哉「動」の山頭火と並び称される。

著作に『鉢の子』『草木塔』『山行水行』など。

